

赤星鉄馬親族への追加インタビュー

1 インタビュー概要

旧赤星邸の利活用に際し、関連があると思われる方々にインタビューを行い今後の検討の参考とするもので、第2回有識者会議では赤星鉄馬の親族の方々からの結果を報告した。この度、接收前から旧赤星邸の状況を知っている赤星鉄馬の長女 秋子の子（孫）から追加インタビューし、その内容に基づき、敷地の変遷を作成した

2 生い立ち等

- ・ 赤星鉄馬の長女 秋子の長女として生まれ、結婚するまで旧赤星邸の南側敷地で暮らしていた。父母が亡くなった後、またこの場所に戻って暮らし、平成27年に母から相続したこの土地を売却した。
- ・ （旧赤星邸南側の）家は、元々は父が建てたものである。母が結婚した際、新築した家を貰う話があったが、断ったと聞いている。設計図に書かれた家は当初から存在しない。そのため、設計図の木造家屋は母のために建築する予定だったものかもしれない。実際に住んでいた家はこの位置ではない。竹やぶの中にあり、大きな蔵もあった。
- ・ 旧赤星邸を「ご本館」、鉄馬の次男が居住していた建物を「ご新館」と呼んでいた。

3 建物の記憶

- ・ 4歳の頃、空襲警報が鳴ると庭師のおじさんが迎えに来て、旧赤星邸の地下に入った。
- ・ 1階の日本間は、食事をする一家団欒の場所だったと思う。
- ・ まわり階段の壁に藤島武二の「天平の面影」という絵画が飾ってあった。無くなってしまったのは残念である。
- ・ 建物東側の部分は、祖父（鉄馬）のスペースであるが、別世界で子どもがいけるような場所ではなかった。また、普段、祖父がどこにいるのか全くわからなかったが、ある日建物2階の書斎に入った時、鉄馬に偶然会ったことがあり今も記憶に良く残っている。
- ・ 現存しない北側木造の部分は女中部屋であったが、鉄馬のスペースとはまた違った意味で、別世界であった。
- ・ 今回の見学で子ども部屋から庭を眺めたときに、修室棟があることによって、昔の記憶とは違い自宅まで見通すことができないのが少し残念である。

4 庭の記憶

- ・ 私が2, 3歳ころの写真にはオーニングではなく、藤棚となっている。そのため、接收前の1941年頃にはこのような状況で、鉄馬が行ったものだとわかる。
- ・ 接收前の庭は、広い芝生の庭と、2つのバンカー、2つの小山、そして周りに木が植わっているというのが子供時代の印象である。
- ・ 接收後には噴水ができて、バンカーや小山がなくなり、平らな芝生に変わった。
- ・ 接收時には、南側の自宅と旧赤星邸とを金網で隔てられていた。また柿の木や栗の木等も植わっていて、木でも分かれていたが、見通しはよかった。接收前には、金網はなかったが、同じように木によって分かれていた。

5 接收時の記憶

- ・ 接收されたのは赤星邸のみであり、自分たちが住む南側は全く関係なかった。おそらく米軍は車回しがあるので五日市街道から出入りしていたと思う。
- ・ 接收時には大佐の夫妻から、西部劇を夜見せてもらったり、お茶に招かれたこともあった。